

痴漢されそうになっている

S級美少女を助けたら

隣の席の幼馴染だった

ケンノジ

Illustration フライ



特別書き下ろし短編 第2話

2 趣味はそれぞれ

昼休憩、物理室で昼食を食べ終えた頃。

ランチフレンドの鳥越^{とりごえ}は、今日も離れた席で一人弁当を突いている。

話しかけようかと思ったら、もう片方の手で文庫本を広げていた。

「何読んでるの」

「……本」

いや、見りゃわかるわ。

ブックカバーをきちんとかけていたので、タイトルや表紙は見えない。

片手に本（恐らく小説）。もう片手に箸。

「ながら読書はしないんじゃないかな」
「それとなく話しかけてみるけど、無言のまま。」

……無視されたっていうより、集中しているせいで俺の声が聞こえてないようだった。

「前、読むときはきちんとか向き合いたいから、何ももしないって言うってただらろ？」

「うん。ただ、ちよつと気になって。この作品は例外」

そう言って文庫本を閉じた。

「どんな話？」

「さほど興味もないくせに」

嫌みのない口調で言うのと、鳥越は口元だけを笑みの形にした。

「あるよ」

「本当に？」

ちよつと疑わし気な鳥越。

いつもは、まあ、鳥越が言うように話題のひとつ程度として尋ねることが多い。訊いたから読みたい、ってなることも少ないから、鳥越としては話す甲斐がないんだろう。

「マイルールを破るほど続きが気になるって、相

「当だと思っから」

「うん。そうかも」

読書好きが夢中になる小説ってのは、すっげー面白いんじゃないかと俺の中ではハードル爆上がりだ。

「純愛系のラブストーリーなんだよ」

「へえ、鳥越にしては意外だな。なんか、その手の青春恋愛モノ？ みたいなのが好きってイメージじゃなかったから」

「好きなのは好きだけど、これは特別にいい。

……いっていうか、尊い」

尊い……？

「先輩後輩の恋なんだけど、男同士でね」

「男同士……の恋？」

「うん。そう言ったと思うけど」

そ、そういう系でしたか。

爆上がりしたハードルの斜め上に行く内容だった。

「そりゃあ……ずいぶんジエンドーレスなこと……」

「やっぱり」

見透かしたように、鳥越が半目をした。

「な、何だよ」

「ちよつと引いたのがわかったから」

「そういうやつだと思わなかったから、驚いただけだ」

「興味持った？」

「持てないよ。開けちゃいけない扉を開けたら、どうする気なんだよ」

「それはそれで、アリってどうか」
ナシだろ。

「人それぞれ趣味が違うから、私の趣味が高森^{たかもり}くんの趣味とは被らないってのを知っているから、あんまり言いたくなかったんだよ」

「配慮を察せられなくて悪かったな」

「ううん。私が何を讀んでいるのか、気になった

んでしょ？」

「まあ、そりゃ」

好事家が夢中になるっただけで無知な素人が気になるには十分な理由だ。

「驚かせないように、今後はこの手のやつを読んでたらどんどん報告していく」

「いや、いい……ダイジヨウブ」

「そう？」

鳥越なりの冗談だったらしく、ふふ、と小さく笑った。